

## 理科・環境教育助成 成果報告書

第3回 期間：2005年11月～2006年10月

氏名： 遠藤健二 所属： 秦野市立上小学校

課題名： 「上地区のいいところ物語を作ろう」

### 1. 課題の主旨

◎ 体験活動を通して、自分と身近な自然や社会との関わりに関心を持ち、地域の歴史や文化そして人々の功績や思いを知るとともに、地域のよさをまわりの人に伝える力を身につける。

- ・ 地域の探検や人々との交流を通して、歴史や文化・人々の功績や思いを知るとともに、地域への愛着を深め、感謝の気持ちや誇りを持つことができる。
- ・ 活動や体験を通して地域の自然をたっぷり味わいながら、自然に対する感受性を養うことができる。

### 2. 活動状況

#### (1) 活動の立ち上げ

「総合とはどんな学習だろう？」という投げかけに対して子どもたちは、今までの先輩たちの活動について知っていることを口々に発言した。高学年のやった活動は、自分たちには無理だという発言も多い中、「大変なことを乗り越えるのが総合だ」という頼もしい意見もあった。「クラスみんなで力を合わせて一つのことをやろう」という共通理解のもと「畑の仕事」「本作り」「地図作り」「動物の飼育」「ロボット作り」「ひみつ基地作り」という6つの願いが出てきた。何度も話し合いを持ち、それぞれのよさや問題点について話し合った。

活動の希望は、さまざまだったが、子どもたちの願いは「上小学校や上地区のいいところをまわりの人に伝えたい」ということで共通していたので、担任の方から地域探検をしてよいところを見つけ、それを本や地図や物語にしていくことを提案した。そして「上地区のいいところ物語を作ろう」というテーマが立ち上がった。最後まで「ロボット作り」にこだわっていた二人は、ロボットを地域の「かかし祭り」に出品したいというアイデアを出し、ゆずらなかった。JAに問い合わせると「かかし祭り」の担当者は、「バラ作り農家」の人だということがわかった。社会科の学習で子どもたちに出会わせたいと思っていた人だったので、思いがけないところで子どもの願いと教師の願いの接点ができ嬉しく感じた瞬間であった。

#### (2) 活動の様子

##### ① 地域探検

総合のテーマが立ち上がる前に、社会科の家庭学習で「家の近くの伝統的な物、おすすめの場所、

有名な人」などの調査をした。4つの地区ごとにその中からひとつを選んで紹介し合い、探検のコースを決めていった。道順や休憩場所の設定、デジタルカメラでの撮影などを地区の子どもが中心となって探検をすすめることになった。

#### <柳川探検>

昔、柳の木がたくさんあったことから、この地域は「柳川」と名付けられたそうである。「M牧場」では、牛の飼育を間近に見ることができ、畜産業への理解を深める機会となった。寺子屋だった「昔の上小長福寺」や林の中の「お宮」も見学した。事前に自転車で下見をした児童もいて、子どもたちの意欲の高まりにおどろくことが多かった。

#### <菖蒲探検・八沢探検>

菖蒲の花がたくさん咲いていたといわれている菖蒲では、「いぼ神様」「馬頭観音」「上秦野神社」「熊野神社」などの伝統的な物や、桜の木や竹林など登校途中にある自然の物などを見て歩いた。また、たくさんの沢があったため、八沢とよばれるようになった地域では、児童の家にある物の紹介が多かった。けやきの木や父親が作った車庫、古い倉庫の扉などである。扉は、150～200年前の物ということであった。

#### <三廻部探検>

北条政子が三回まわったという伝説の残る三廻部では、児童の家である「観音院」や、ひみつ基地、四十八瀬川が案内された。

どの地域も坂が多く、暑さも厳しい中だったが、自然の美しさや風の涼しさ、人々の温かさや功績にふれ、あらためて自分たちの地域への愛着を深め、感謝の気持ちや誇りを持つ機会になったと感じる。

#### ② Wローズガーデン見学・かかし祭り取材

秦野市は、高速道路を利用して東京や横浜などに短時間で行くことができるので、ハウスでのいちご作りや花作りがさかんである。「Wローズガーデン」では、バラ作り農家の仕事を見学することができ、子どもたちの学習に大変役立った。それと同時に「かかし祭り」の看板を貸していただくこともでき、有意義な探検となった。子どもたちは、とても喜び重たい看板をみんながかついで学校まで持ち帰った。その看板には、「かかし祭り」が地域の活性化のために始まったことや、大人と子どもの交流を大切にしていること、案山子の歴史などについても書いてあった。

子どもたちの思いは、「役に立つロボットを作りたい」「大人に子どものアニメを知ってもらいたい」「がんばって作ったことを伝えたい」ということだった。その思いをかなえられる物として

「クレヨンしんちゃん」と「カンガルー」の2つのかかしを作ることが決定し、材料や道具も決まっていた。いよいよ制作が始まった。「かかし祭り」の運営委員のUさんが、子どもたちのために骨組みを作って持ってきてくださった。子どもたちも古いくつや洋服を持ち寄り、新聞紙やペットボトルなどを利用して作り出した。作成の過程で、インターネットや図鑑で調べたり、のこぎりや針と糸を使ったりという問題解決の場面が見られた。また、もともと仲のよい子どもたちであったが、助け合って作り、2日間で作り上げ担任をおどろかせた。

### ③ かげ絵「かかし物語」の作成と「かんしゃの会」

活動のまとめとして一つの作品を作りたいと思っていた。始めは子どもたちの発想にもあった本にしようかと思っていた。紙芝居や劇、群読やオペレッタのような形も考えられると感じていた。内容としては、曾我兄弟が父親のかたき打ちをしたねがいごとがかなうという寺「不動院」の話や、初めて水道を引いた人々の話などがいいと思っていた。子どもたちも「かかし祭り」が終わるとそれだけで満足しているような感じがあった。しかし、先生方から「かかし祭り」について、わかったことがたくさんあったし、一番知っているのは3年生だから、それをまわりの人に伝えることが大切なのではないかというアドバイスをいただいた。

雨が降って、理科の「太陽とかげ」の観察ができなかった日にスクリーンを教室に運び、図工で作成した「光とかげ」の作品を映してみた。その美しさと不思議さに子どもたちは歓声をあげていた。そこで「かかし物語」をかげ絵で表現するのはどうだろうかという提案をしてみると喜んで承知してくれた。今年度の演劇教室がかげ絵だったこともあり、イメージもわきやすかったのだと思う。

2学期の終わりから「かかし物語」作りが始まった。場面作りをし、伝えたいことを入れ込み、必要なペープサートなどを作成した。台本作りをするとき、子どもたちにとっては初めてのことで全部任せるのは不安があった。そこで「1場面」だけ、子どもたちの発想を入れて担任の方で台本にして提示した。そこに子どもたちのアイデアを入れ「1の場面」ができあがった。「2～4場面」は、子どもたちが作り上げていった。苦労して作ったことや運んだこと、まわりの人への感謝の気持ち、楽器による音作りも入れていった。

3学期になって、練習と「かんしゃの会」の準備を始めた。「1の場面」を練習し、最後にはビデオで撮影して感想を言い合った。自分の担当した部分を休み時間にも練習していた子どもたち。他の人の台詞まで暗記して言えるほどになっていった。「早く、みんなに見せたいなあ」「総合が楽しみ」という声が聞こえるようになった。特にテーマを作るときに「ぼくは、絵を描くのも文を書

くのも苦手だからいいとこ物語 じゃなくていいとこじまん にしたい」と行っていたY君が、かげ絵を発表することに意欲的になっていたのも、とても嬉しく感じた。

「かんしゃの会」には、「Wローズガーデン」のWさんとUさん、Kさんそして家の人たちを招待した。子どもたちの発案で、座席表や名札を作り、折り紙で作った首飾りをお客さんの首にかけてあげた。音楽の時間に練習した「小さな世界」の合奏とかげ絵「かかし物語」を発表した。

子どもたちが、一生懸命に活動したことを家の人もお客様も喜んでくださった。Uさんからは「1つの行事をふりかえって、このようにていねいに扱うことが子どもたちの学びの定着につながる」というおほめの言葉をいただいた。

最後に、今までの活動の足跡をまとめて本を作った。「上地区のいいとこポケット」という掲示コーナーにあった物（探検した場所で撮影した写真とその説明、探検した道順を表した地図（パソコンで打った物、そして「かかし祭り」に参加した感想）を製本した本である。活動の立ち上げのときに地図や本を作りたいと言っていた児童も満足げであった。

### 3. 結果

- デジタルカメラでの撮影、保存や呼び出しなど情報機器の扱い方が上達した。
- 地図作りや招待状作りなどでパソコンを活用する機会が多くなった。
- 社会科の基礎的な知識・理解の習熟度が増した。
  - ・ 地図記号や方位、土地利用や産業の様子とそれにたずさわる人々、地域の伝統や文化・人々の功績などについて学ぶことができた。
- 自分の住んでいる地域を誇りに思い、まわりの人々に支えられていることへの感謝の気持ちが養われるいい機会になった。
- 仲間と力を合わせて課題解決に向けてこの一年間よく努力した。

### 4. 今後の課題と発展

- はじめに「子どもありき」の考えでスタートした「総合的な学習の時間」ではあるが、子どもたちの思いのうち、4つはかなえることはできた。残り2つの願いをどの教育活動の中で展開していくか迷いながらの一年間であった。子どもたちの発想と担任の考えとのバランスをうまくとっていくのが教師の力量ではあるが、難しさを痛感している。
- 今回の活動で、子どもだけにまかせると深まりがなくなる、また、教師の発想だけでは押しつけになると痛感した。学ばせる内容や、つけたい力についてさらに研修を深め、子どもの発想をうまく生かしてあげられるよう力をつけていきたい。
- 「子どもの追う活動」の中に「価値ある内容」を見つけながら、思い出に残る活動を展開していけるように努力していきたい。

### 5. 発表論文、投稿記事及び当財団へのご意見など